

---

# 卒業式の、その後。

ユキジ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

卒業式の、その後。

### 【Nコード】

N1242E

### 【作者名】

ユキジ

### 【あらすじ】

私は今日、中学校を卒業した。高校への不安を持ちながら、友人たちと最後の中学校生活を過ごす。

今日、私たちは中学校を卒業した。

卒業式を無事に終えて、私たちは教室に戻って担任の話を聞いた。記念撮影したりと何かと忙しく時間を過ごし、最後はみんなで泣きながら教室を出た。これでもう、この教室に来ることはないのだろ。そう思うと、少し寂しい。

その後は校舎の玄関を出て、もう一度思い出に記念撮影。今度は違うクラスの子や後輩も入って結構混雑している。

記念撮影もほどにして、友達がある提案をした。

「卒業式なんだから、告白する人も多いはず！面白そうだから見に行こうぜ！」

それを聞くなり「それいいね！」「青春だねー！」「そういえば隣のクラスの子が今日告白するって気合入れてたよー」「よし、ターゲットはそいつだ！となると、告白といえばやっぱり校舎裏でしょ！」

と、いうことで。さっきまでの涙はどこへやら、まだまだ好奇心旺盛な私たちは、人だかりの場を出て校舎裏に行くことになった。

「うわーっいるよ！ほんとにいる！」

校舎裏を覗いた誰かがこそそと報告。うわ、本当にいるとは思わなかった。

しかし騒いでる私たちに気がついて、男子の方がこちらを覗む。私たちはあわててその場から逃走した。

ダッシュで走ったので息も切れてきて、みんなでそこらへんにあった花壇に座り込む。

「バレちゃったねー。せっかく告白してたのに、悪いことしちゃったかな？」

「あんだけ騒げば普通にバレるだろ！まあ、中学生最後だし、い

いんじゃない？」

「いやあ、でも青春だったねえ。あー私も告白されたいー」

「じゃあ私が告白してあげよう。好きだ！！付き合ってください！！」

「よろこんで！」

ふざけて告白ごっこかして、お腹が痛くなるまで笑いまくった。そんな姿を見ていると、こうやってみんなで笑えるのも今日が最後だなんて思えなかった。いつもの教室の風景。今思い出しても、馬鹿やってたなあって笑えてくる。

「あ、そうだ！」

ここでまた、友達の一人が何かを思いついたらしい。悪戯っ子の表情で、

「探検ごっこしよう！」

と叫んだ。

もちろん、内容を聞くまでもなくみんな賛成である。

どうやら探検ごっこことは、先生に見つからないように校舎をこっそり探検するというもの。まあ、名のとおりだね。

でも、最後に校舎をじっくり見ておくのもいいかもしれない。みんなもそう思ったのか、すぐ乗り気だ。

まずは教室に行くことになった。入学したてで、まだ何も分らなかった私たちがいた、一年生のときの教室。1年組、というプレートが入り口前についていた。

「あのころは私らも若かったよねえ」

なんて年寄りくさいこと言いながら、校舎をまわっていく。教室の中へはさすがに入れないので、少し見るだけである。

クラス対抗の合唱コンクールに向けて、必死に練習した音楽室。みんな必死で、けれどなかなかクラス全体がまとまらなくて、クラス内がちよっとぴりぴりしていた。でも最後は、優勝はできなかったけれど満足する合唱ができた。

次に、美術室。変なもんばっか描いて、これは傑作だ！とか言い

ながら遊んでばかりいた。みんな、すつごく絵上手いんだもんなあ。家庭科室ではお菓子を作って、食べすぎてお昼の弁当が食べられなかったこともあった。

他にもパソコン室やら体育館やら、思い出のたくさん詰まった場所へ行った。私たちは先生に見つかってはいけないというルールなど忘れて、職員室へも行った。やつぱり怒られたけど、先生もなんだか嬉しそうだった。最後に、今までお世話になった先生に挨拶をして、探検ごっこが終わった。なかなか楽しかった。

その後も飽きることなくみんなで思い出話をしてから、昼になってお腹もすいたということで、ようやく帰ることになった。

「じゃ、またどこかで会おうねー」「たまにはメールしてね!」  
帰る方向が違う子たちとは先に分かれて、残った子たちでまたたくさん話をした。

「私たち、みんな高校分かれちゃったじゃん。また会えるのかなあ?」

「あー、これから先、連絡とれなくなる子もいるかもね・・・」  
さっきまでの楽しかった時間から、急に現実に戻された気がした。みんな自分の将来に向けて、自分の進路を決めていく。だから当然、進む高校も違うのだ。みんな自分の夢を持って、少しずつそれに向かっていく。けれど私はまだ将来なんて考えてなくて、高校を卒業してからも大学へ行くのか、それとも就職するのか、将来の自分が何をしているのかも想像することができないのだ。

それを冗談っぽく友達に言ってみた。意外にも真剣に答えてくれた。

「自分が何してるかなんて、分るわけないよ。まだ高校に入学もしてないんだよ?卒業してからなんて、ゆっくり考えていけばいいま、一度しかない高校生活を楽しまないかね。深く考えすぎ。もっと気楽に行きなって」

そう語る友達は、いままで私が見たこともない表情だった。すっかり自分の意思を持っていて、かっこよかった。私は悩んでる自分

が可笑しくなつて、自然に笑つてた。友達はずき言つた言葉がなんだか恥ずかしかったのか、冗談をいくつか言つて笑つた。

そうだよな。うん。少しずつ、決めていけばいいか。

私はこんなに頼もしい友達を持っているのだ。きっと大丈夫。悩んだときは、また相談にのってもらつて、嫌なことがあつたときは励ましてもらおう。悩むなんて、私らしくないんだ。

「何にやけてんのさ。あ、じゃあ私、家こつちだから。ばいばーい」

別れを告げて、私も早く家に帰ることにした。友達がいなくなるのと、急に寂しくなつた。でも、さつきまで馬鹿みたいに騒いでたら、これからもう二度と会えないとか思えないよなあ、と思い出し笑いしてしまつた。

私は高校生になつた自分を想像してみた。周りが知らない人だらけで、おろおろしていて、いろいろ不安だらけだろう。

今もすごく不安だ。実は卒業式中、みんなと離れることが怖くて私は卒業を祝うことができなかった。友達や先生におめでとうと言われても、悲しかった。

でも今は、心から自分と友達の卒業を祝つて、将来に向かって頑張つていこうと思える気がした。

携帯電話を取り出して、新規メール作成の画面を開く。宛先は、今まで私を支えてきてくれた友達に。題名は、いつもみたいな気安さで適当に。本文は、寂しさとかを悟られなくて精一杯に絵文字で飾つた。文章を打ち終わると、送信ボタンを押す。

私は送信完了の表示を確認して、携帯電話を閉じた。

Re: あ、そういえば言い忘れてた

> 卒業おめでとう!!

中学校生活すつごい楽しかったよー! 高校生になつても、また遊ぼうね! 私も高校生頑張るよ

今までホントに、ありがとう!!

（後書き）

卒業式をテーマに書いてみました（時期はずれてね？）。相変わらず文章めちゃくちゃですが、笑って誤魔化してやってください。もっと感動できる文章とか書ければいいんですけど・・・力不足ですて・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1242e/>

---

卒業式の、その後。

2011年1月15日22時23分発行